

## ◆平成 25 年度 第 3 回 (通算第 36 回) 蔵前ゼミ 印象記◆

日時：2013 年 6 月 21 日 (金)

場所：すずかけ台 J221 講義室

### 失敗こそ我が人生の師

栗橋 寿 (1983 社会学) ワック (株) 代表取締役会長

ラストシーンが美しかった。月に初めて降りた宇宙飛行士の足跡を大きく映しながら、こう結んだのだ。20 歳の頃は自分自身が何をしたいのかわからず悶々の日々を過ごしていた。周りを見ると自分より優秀な人ばかりに見えた。まさしく五里霧中だった。こんな状態では就職はできないし、大学院も無理だ。留年して 4 年生を 2 回やることにした。その間に、深い考えも無しに、丸い地球上で日本の反対側はどうなっているのだろうかという単なる興味から、一人で南米を 4 か月間さまよった。その時に偶然出会った もう一人のさまよえる日本人ノブさんが発した一言で、心に立ち込めていた霧が晴れ始めた。「栗橋よ。人生ってどういうものだと思う？オレはもう決めている。人の心に足跡を残すのがオレの人生なんだ」。それから 30 年。母校で話す機会をもらって思うのは、人の心に足跡を残すって大変だし、実際 よく考えてみると自分には大それたことすぎる。せめて自分の心に自分の足跡を残したい。幸い 今は一緒に仕事をしていける仲間がいる。お金がなくとも、社会的名声はなくとも、ワクワクするものがある。私にはこれで十分だ。これからも現代の寅さんを目指して頑張りたい。

寅さん<sup>(注 1)</sup>は 余りにも有名だから説明不要だろう。この映画を初めて観たのは、私が米国でポスドクをしていた 35 年ほど前だが、異国に在って日本情緒を感じやすくなっていたせいもあって、心にしみたのを覚えている。もう一つ思い出したドラマがある。さすらいの犬 (正義を愛し、弱い者を助ける小さな放浪者) を主人公に、すがすがしさと哀愁を織り交ぜた名作で、私たち定年世代には忘れがたい<sup>(注 2)</sup>。主題歌を聞いただけで懐かしさが込み上げてくるという人も多いだろう。今回の講義もこれらの名作に匹敵するものだった。

栗橋さんは栃木県の男子校を経て、1978 年に本学に入学した。冒頭で紹介したように悩める学生時代を過ごし、希望留年をして、さすらいの旅に出た。軍資金は半年間アルバイトをして貯めたが、

当時は航空券が高く、チケットを買ったら手元にはわずか 20 万円しか残らなかった。これで 4 か月間 南米を旅し、イグアスの滝、チチカカ湖、マチュピチ、マウント ミスティ (ペルーの富士山と称えられる名峰、5821 m) などの観光名所も回った。もちろん寝袋が頼りの毎日だった。心は霧の中のまま、ペルーのアレキパ市 (標高 約 2300 m) に来た時に、「オマエ日本人か、オレの下宿に泊めてやるよ」というわけで、一週間ほど世話になったのが、前述のノブさんだ。彼は 20 歳の時に日本を出たきりで、10 年以上も日本に帰っていないとっていた。そのときは銀山で働いていた。「Mt. ミスティに登りたかったが、相棒がいなかったから我慢していた。一緒に登らない？」というので、食料と水を買って込んでトライしたが、スニーカーでは厳しく、途中でノブさんがギブアップ。栗橋さんは高山病と闘いつつ、ユカの葉を噛みながら、かろうじて登頂を果たした。這いつくばりながら目にしたものは何だったか。反対側から登ってきたボーイスカウトの子供たちの元気な姿だった。ノブさんと栗橋さんを苦しめた Mt. ミスティだったが、地元の子供たちにとっては遊び場の一つになっていたのだ。6000 m 近い山で遊ぶ子供たちの姿は衝撃的だったらしい。高山病も特異な経験だったようで、下山しても眠くてたまらず、体が浮く感じはしばらく抜けなかったそうだ。こんな時に冒頭の「人の心に足跡を残す」話を聞き、心を動かされた。一条の光が差し込む思いがしたそうだ。

日本に帰ってから就職活動を始めた。海外勤務が希望だったので商社を回ったが、完全に出遅れだった。当時は 4 年生の 10 月 1 日が解禁だった。といっても 10 月 1 日に内定が出るが多かった。その 10 月 1 日に、ある商社を訪問し「貴社を受けたいのですが」といったのだ。その商社では 1983 年度の採用枠はすべて埋めていた。空きのない状態だったが、栗橋さんの何かに強く惹かれたのだろう。何とか別枠で採用してくれることになった。

無理をして採ってもらったのに、何と入社式に遅刻してしまった。原因は、春休みに2週間ほどスリランカに行っていて、日にちの感覚がずれていたためらしい。ひょっとして、明日ではなく、今日が入社式ではないかと心配になり、会社に行ってみると悪い予感が的中。新入社員50人ほどが午前中の研修を終え、昼食をとろうとしていた。慌てて合流したが、誰も声をかけてくれなかった。後日談だが、適当に日焼けしていた上に遅れてきたので、皆現地採用の外人と思い、日本語が通じないのではないかと敬遠されたのだ。

ここで、栗橋さんの講演題目「失敗こそ我が人生の師」と関連づけて整理しておこう。失敗とは、**①**就活に出遅れ、**②**入社式に遅刻し、**③**英語ができないのに商社に入社し、**④**海外プラントで期待されたほど現場の役に立てなかったことだそう。海外プラントの話（クウェートで石油プラントを建設した時の話）はこんな内容だった。

クウェートといえはイスラム教の戒律が厳しい国だ。日本のような娯楽は望むべくもない。想像できないだろうが、皆、水を飲みながらカラオケをやっていたそう。石油プラントの建設作業員といえは強者（つわもの）揃いだ。しかも日本から派遣されるだけあって腕は超一流だった。そんな彼らを側面から支援するのが栗橋さんの仕事で、コックの手配や日用品の買い出し、さらには役所に図面を届けて許可を取るなど現場の雑用係として駆け回ったが、栗橋さんの自己評価では、英語力不足で満足な世話ができなかった。一流の職人が納得してくれる支援とはとてもいえたものではなかった。俺は何しに来たのだろうと肩身の狭い思いだったそう；栗橋さんの言葉を借りれば、針のムシロ状態だった。過酷な労働に耐えている彼らのために何かしてやりたいという気持ちが通じたのだろうか、しばらくしたところで、インド人のクレーン技師がこっそり差し入れをしてくれた。これが現場の作業員たちに大受けで、栗橋さんの“株”は急上昇した。「栗橋でかしたぞ！」というわけで、「オマエ何しに来たんだ」と言わんばかりだった作業員たちの態度が一変した。気性の荒い彼らの心をつかんだ差し入れが何だったのかという肝心要のところは聞き逃したが、「皆さんは決して真似をしないで下さいね」ということだったので、質問も出来ず、読者の皆さんにお伝えできないのが残念だ。是非、聴講した学生に聞いて頂きたい。帰国後も、現地からは「また栗橋をよ

こして欲しい」という要望が絶えなかったそうだから、日本ではとても手に入らない貴重なものだったに違いない。それにしても、愚直なまでに、努力さえしていれば、人は見ていて、誰か助け船を出してくれるものだとつくづく思った。

栗橋さんの第一声は「身内なので、今日は恥をさらすつもりで話したい」だったが、この講演会が講義「企業社会論」の一環であることへの配慮も忘れなかった。「企業とは何か」を正直に伝えておきたいということで、栗橋さんの経験に基づく「企業の姿」が紹介された。教科書的な「企業」の定義と一味違い、印象深かった。栗橋さんによれば、**①** まず、えらく窮屈だ；上下関係で成り立っており、何事もお伺いを立てなければならない上に、厳しい競争がある。**②** 運・不運が大きい；どのような上司のもとでどのような仕事をするかという最も重要なことが自分で決められない。**③** 派閥・ゴマすりは当たり前。**④** 自分の将来を自分で決められない。**⑤** 与えられた仕事なので、何十億円のプロジェクトを動かしてもワクワクしない。というわけで、栗橋さんは再び堂々巡りの霧の中に入りそうになった。もちろん同僚たちの中には、ゴマすりもせず、クールに億円単位の仕事をこなし、課長になっていく人もあれば、ゴマすりと派閥を生かして昇進していく人もいた。良し悪しの問題ではないので、それが好きで性にあっている人はその道を進めばいいとのことだった。ゴマすりをして血が騒げば、その道を究める。そして地位を得たならば、いい仕事をすればいいだけの話らしい。ゴマすりだけで終わる人はめったにいないからだ。ちゃんと責任さえとってくれば文句は言うまい。栗橋さんの基準によれば、ゴマも摺らず納得できる仕事もせずが一番いけないようだ。ゴマすりが苦手な人は、腕によりをかけて仕事をする（摺る）しかない？!

栗橋さんの心に再び霧が立ち込めはじめていた1990年頃は、まだバブル景気（1986～1992）の真ただ中で、栗橋さんの商社も豊富な資金を生かして新規事業を始めていた。その1つが、大型遊具を輸入し、日本各地の遊園地に納めるというものだった。この事業の責任者だった栗橋さんは、ある時、納品した遊具を使うアトラクションの手伝いをした。春休み中でまだ肌寒かったが、多くの子供たちが、手に手に100円玉を握りしめて押し付けてきた。子供たちが順番待ちをしている間しっかりと握り締めていた100円玉—温かく湿っ

た 100 円玉—が栗橋さんの人生を変えた。100 円玉のぬくもりで、雷に打たれたような状態になるのだから、人の心は不思議だ。商社で扱うお金の比べれば、数十万分の一だが、「こういう仕事もあるんだな」としみじみ思ったそうだ。

それまで栗橋さんの心の片隅には、出世しなければならぬのではないかとという強迫観念があった。自分の心とは別に、親や世間体という幻想に惑わされ、真に自分のやりたいことが見えなくなっているのではないか；このまま課長を続けるか、わくわくする仕事を始めるか、と悩みぬいたすえに“わくわく”をとることにした。そのほうが自分に合っているように思えたからだ。しかし“わくわく”の方は具体的なめどがたっていたわけではないので、結果は悲惨だった。⑤入社 10 年目で独立し、起業はしたが仕事来ない。全く来なかったそうだ。今から思えば、基盤もないし、名の知れた商社という後ろ盾もないので当然だった(注3)。落ちぶれ、親からは勘当される始末だ。恵比寿の路地裏の長屋(風呂無し、共同トイレ、住人は留学生のみで家賃 3 万円)の生活となった。広告代理店の社長に頼み込んで、その事務所に机一個を置かせてもらっていたが、電話すらかかかってこなかった。広告代理店の人に心配をかけたくなかったので、午後は営業に行くふりをして、映画館に行くことが多かった。筆舌に尽くしがたい窮乏生活だったようだが、それよりも一人ぼっちであることのほうが辛かったそうだ。

2 ヶ月程したところで、商社の元上司が心配して電話をくれた。現状を説明すると、「お前、そんなに大丈夫か?」「大丈夫かどうか分かりません……」「お前なー……、……仕事やるわ。丁度お前の引継ぎが悪くて後任が困っている。日当 15,000 円で、朝 9 時から夜 12 時まで働くんだぞ!」「いいですよ」というわけで、以前と同じ仕事を日雇いですることになった。翌日出社したときの様子はこうだ(以前の同僚たちは何も聞かされていなかったらしい):「おはようございます」「栗橋、お前、どうした」「実は……」「エエーッ!」。こうして栗橋さんの“日雇い下請け”生活がスタートした。前と同じ職場で同じ仕事だが、年収は 1/3 以下で、しかも飲み屋での商談のときなどは一滴も口にせず、記録係に徹する役回りだ。しかし楽しかった。なんとといっても生活が安定し、一人ぼっちでなくなった。気楽にやれるし、失うものは何もない。何が起ころうとも Happy 以外の何もので

もない。これ以上下りようがないので怖いもの無しという境地だったようだ。

そしてバブル景気崩壊とともに、転機が訪れた。商社に余裕がなくなり、本業回帰を迫られ、遊園地事業を手放すことになったのだ。「栗橋君、そんなにこの仕事が好きなら、君の会社でやらないか。従業員も好きな人を連れて行っていいよ」と破格の取り計らいだった。⑥これでもうまくいくかという、そうはいかないのが世の中のような。まず正規の従業員で栗橋さんのベンチャーに来るといいう人が見つからない。結局、非常勤だった人たちだけが喜んでついてきてくれることになった。営業も商社の場合はその信用力がものを言うが、名もないベンチャーとなると苦しい。しかも、既存の業界やマーケットには強敵がいる。遊園地設備業界も例外ではない。真っ向勝負では勝ち目が無い。思案をめぐらせ、ようやく“移動遊園地”にたどり着いた。100 円玉のぬくもりから 3 年程たっていた。

⑦これなら競合がないし、何とかやっていけそうだと少し安堵していた矢先に、奇妙な電話がかかってきた。「浅草の誰某だが、ちょっと顔を出してほしい」というので行ってみると、全国の祭り等を渡り歩いている業者の仕切り屋さんだった。移動遊園地ということで目を付けられたのだ。何なら商売ごと(目玉が飛び出るぐらいの)高額で買い取ってもいいと言われたが、それは毅然と断った。絶対に競合しないことで手打ちにしてもらったが、膝がガタガタ震えたそうだ。普通のサラリーマンだと腰が引けて何も出来なかったか、金額に負けて移動遊園地稼業を売り渡していただろうとのことゆえ、相当な修羅場だったようだ。

こうしてショッピングセンター(SC)で移動遊園地をやるという方式に落ち着いた。折しも、SCもラポートのように大型化し、栗橋さんのような移動遊園地を集客に利用しようという機運が高まっていたので、独壇場となった。このように紆余曲折を経て、1996 年に、(株)ワックの設立にこぎつけ(注4)、「世界一の感動空間」を届けるべく、大型複合商業施設内のファミリーイベントやキッズアトラクションを一手に引き受けている。栗橋さんたちの移動遊園地を訪れる子供たちは、年間 150 万人で今年は 200 万人に達するのではないかとのことだった。富士急ハイランドなみで、豊島園の年間入場者の 2 倍近い数字だ。イベントは週末に

集中するので、学生アルバイトが戦力になっている。ワックに登録している学生は全国で約 1000 名、毎週末 300 名の学生アルバイトに来てもらっているそうだ。SC の片隅で、タイヤ式機関車を走らせたり、本物の化石発掘アトラクションをやったり（売り物にならないためにただ同然で入手できる本物の化石を使うところがミソ）、氷不要のアイススケート場を開いたり（イギリス製の特殊プラスチック樹脂が氷の代わりにしてくれ、普通のスケート靴で滑ることができる）、動く恐竜ランドを作ったり（中国の四川省・成都の自貢にある会社が安く世界に供給している）と日々進化を遂げている。それには海外との取引が欠かせない。世界を飛び回って最新情報を集めなければならないのだ。アトラクションもグローバル展開の時代に入っており、この意味では、栗橋さんの商社での経験は、移動遊園地を始めるためのプロローグだったのかも知れない。これからは、IT と英語を駆使して **International Business** を展開していかねばならないが、忘れてならないのは栗橋さんが強調したのは、言葉よりは心意気だということだ。アトラクションの世界でも、突っ込んでいくと、機械・制御・材料・筋肉の造りなど専門知識が必要で、本学で学んだことが大いに役立っているとのことだった。

栗橋さんの使ったプレゼンソフトが気になった人も多いに違いない。クラウドベースで作成・発表・共有できる **Prezi**（プレジー）という次世代プレゼンツールだ。拡大縮小が自由自在にできる一枚のキャンバス方式で、思いつきや図を適当に貼り付けていき、後でリンクを張れば出来上がるので便利だ。考えを整理し、研究戦略を練ったり、論文のまとめ方を考えたりする際にも役に立つ。KJ 法のパソコン版である“インスピレーション”を進化させたもので、お勧めだ。ただし画面の動きが速すぎる（華麗さを追求し過ぎる）と聴衆がついていけなくなるので要注意だ。

栗橋さんの話を聞いてから 3 週間ほど経過した今は夏本番だ。日差しが強いと 28℃設定では暑く感じる。熱中症予防のために清涼飲料水を買に行き、自販機の前で 100 円玉を手にするたびに、栗橋さんの声が聞こえるような気がする：「人に相談すれば、安定していて成功が保障されている道を勧めるに決まっている。迷ったらワクワクするかどうかで決めるのも悪くないですよ」。夏が過ぎても 100 円玉症候群から抜け出せそうにない。

(注1) 一世を風靡したテレビドラマ及び映画『男はつらいよ』（1968～1997）の主人公で、テキ屋稼業を生業とする。フーテンの寅さんとして国民的に愛された。何かの拍子に故郷の葛飾柴又に戻ってきては騒動を起こし、また旅に出るという設定。旅先で出会ったマドンナに惚れつつも、失恋するか身を引くかして成就しない恋愛模様を日本各地の美しい風景を織り交ぜて描いた人情物語。

(注2) 名犬ロンドン物語 **The Littlest Hobo**: 1958 年のアメリカ映画を基に製作されたテレビドラマシリーズ（1963～1965）。さすらいの犬ロンドンが行く先々で人々を助け、一時の友情の絆で結ばれるが、またどこへともなく去っていくという筋立てで、日本でも人気を博した。ふとした折に、主題歌を口ずさんだ人も多いに違いない。『見知らぬ この町/さまよえば/遙かな思い出/胸によみがえる/友を求め行く旅は/果てなきさすらい//あの町この町/幸せはいずこ…』

(注3) 起業する際の注意点に関しては、本ゼミの 2012 年 5 月分（岡田 祐希「社会に出るということ：中小零細企業の経営を通して学んだ“人”という存在」）の印象記参照。

(注4) 2012 年度「蔵前ベンチャー賞」受賞。社名のワックは“ワクワクする”に由来。

（東京工業大学 博物館 資史料館部門 特命教授 広瀬茂久）